

地域映像アーカイブ・クインテット ― 地域との連携による新たな取り組み

原田 健一（新潟大学）

1. 地域のさまざまな機関との連携による展示

新潟大学地域映像アーカイブセンターでは、2013年11月～12月にかけて新潟市内5ヶ所の展示施設で連携して、学ぶ機会を創造し、過去から未来へ無限に進化する写真・映像メディアの展示会を開催します。新潟県立生涯学習推進センター、砂丘館、新潟日報情報館 COMPASS、新潟大学駅南キャンパスときめいと、新潟大学旭町学術資料展示館で、同時多発的な展示会を行います。

また、上映・展示される映像は、地域映像アーカイブセンターでデジタル化した中俣正義の16mmの映画と写真、また新たに発見された奥只見・奥会津の金山村で60年間、村びとを撮り続けた角田勝之助の写真だけでなく、新潟市歴史博物館みなとびあが所蔵する雑誌メディアで活躍した小林新一の写真、また新潟日報社の新聞のニュース写真を一同に会した新しい展示を試みます。

映像は、記録として、あるいは現代アートの一角として、また多様な表現手段として、アマチュア、セミプロ、プロを問わず膨大な作品を生み出しつつあるメディアです。今回の5ヶ所の展示は、写真誕生以来、映像によって解析可能な歴史を未来へ向かってより良い方向へ解放していくプロセスとして、さまざまな立場を越えて、映像のひとつの可能性を創り出そうという試みです。さらには、地域にあるアーカイブとアーカイブとを結び、連鎖した地域の映像アーカイブスを展開し、保存された貴重な写真や、動画を展示することによって新たな社会的な文脈へと置いていこうとする作業でもあります。未来を写したコミユナルな映像の貴重なひとこまを、新たに新潟から発信したいと思えます。

2. 新潟日報メディアシップでの展示の意図

新潟大学地域映像アーカイブセンターは、2013年4月

に、新潟日報社メディアシップ新潟日報情報館 COMPASSと連携して、展示などさまざまな取組を一緒に行っていくことになりました。今回は、1964年6月16日におきた「新潟地震」をひとつの大きな事件として、人びとがその事件をどう捉え、どう表象したのかを、さまざまな角度から、映像で検証します。さらには、記憶の外部装置である映像という鍵によって、人びとの心の底に沈殿して普段は隠れているさまざまな経験を甦らせ、時に共感と違和の間でさまざまな思いで交差する記憶を顕在化させることを試みます。

この展示では、写真については、新潟日報社の新聞のニュース写真と、雑誌に報道写真（組写真）を載せていた小林新一の写真、そして、県の観光課に勤め写真家としても活躍していた中俣正義の写真の3つを展示します。さらに、映画については、新潟映画社が「日報ニュース」として新潟地震を報じたニュース映画を『新潟地震』（1965年）としてまとめたもの、また、新潟市視聴覚ライブラリーが、地震によって学校が倒壊したのをうけ、解体し新しい校舎を建設することになるまでを記録した『校舎よさようなら』（1964年）、さらには、新潟県の職員（推定では中俣正義）が撮影し、作品化されずに断片的に残された新潟地震の映像である〈新潟地震・断片〉（1964年）を、上映することにしました。

ところで、新潟地震を経験した人びとは、しだいに少なくなってきました。全ては、消え去った過去になりつつあります。しかし、そこで起きたさまざまな出来事、あるいはそのなかで感じたことは、時を経て、映像を通して再体験することができます。さらに、経験しなかった若い人たちも、映像を媒介として、その体験を感じ取ることが可能です。

私たちは、ただ、昔を懐かしむためにこうした映像を展示したり、上映したいと思っていません。そうではなく、こ

うした映像を通して、どうやったら、かつて人びとがビビットに感じていた経験を、今の何も知らない人たちも、同じように追体験できるかを考えたいと思っています。そこで、今までとは少し違った上映・展示を行いたいと試みました。例えば、同じ地震体験でも、被災した場所、その体験した年齢、さらには職業、置かれている社会的立場によって、その見え方、感じ方は微妙に違います。それと同じように、記録し、表現する映像メディアによっても、同じような微妙な違い、起伏があります。今回の展示では、そのことに焦点をあてました。小さな微妙な細部、なぜここにいて、この時、これを、こうして撮ろうとしたのか、映像には表れない見えない現実を想像できるように、いくつかの仕掛けをしました。

本誌の表紙を飾っている写真は、中俣正義が6月16日、地震の当日、白山駅の所で撮影したものです。もし新聞のニュース写真としてこれを見れば、人びとの顔の表情が写されていないことは、失敗といってよいでしょう。しかし、中俣はニュース報道に求められる「誰が、何を、いつ、どこで、なぜ、どのようにしたか」という客観性を選ばませんでした。それより、多くの被災者と同じように、どうその事件、地震を感じ、見ているかを当事者と同じ目線で、写真に残そうとしました。

一方で、新潟日報の写真は、新聞社のニュース写真として、新潟地震における液状化現象や、一見近代的で頑丈と思われていたビルや橋などの公共建築が割れ、倒壊している様子を克明に記録しました。また、日赤や自衛隊の救援活動、避難所の様子など、現在の地震災害ニュースの基本的なパターンを作り出し、見事な出来映えといつてよいでしょう。

しかし、新聞ほど速報性のない雑誌メディアで活躍していた小林新一は、こうした速報的なニュースヴァリューを追い求めませんでした。一見、地震の写真とは見えないような、仮校舎で授業をする子供たちや、急ごしらえのバスの仮設住宅での人びとの生活ぶりや、地震後の首切りや賃下げに反対する労働組合の集会の様子などを丹念に写しました。それらは、地震というものを短期的な時間でみるのではなく、長期的にみるものであり、一見、地震とは

関係ないようにみえて、実際には地震の人間社会的な顕れでありました。

中俣は、こうした人間社会の底にある、自然が孕み持つ時間の厳格さを県営アパートの倒壊、解体・取り壊し、魚礁として海底に沈められるまでの過程を通してシンボリックに追い続けました。また、信濃川を挟んで右岸と左岸に広がる地震の災害地帯を上流から下流へと、空間軸にそって映像で再構成しようとし、撮影をし続けました。そこには、地震というものがもつ自然性と、それへの畏怖が心の底深くに横たわってみえます。

中俣正義





中俣正義



新潟地震・記録と記憶
— 新潟日報、中俣正義、
小林新一が写したものは何か —
2013年11月23日(土)～12月8日(日)
新潟日報情報館 COMPASS



小林新一



新潟日报社

